

駿河ほねほね団活動報告

佐々木彰央



図1. 作製途中のハクビシンの骨格

駿河ほねほね団は本年度も毎月1回のペースで活動を続けています。現在取り組んでいる動物はハクビシンで（図1）、前号で紹介したタヌキと同様に骨格標本の作製をおこなっています。そこで、今回は骨格標本についての簡単な説明と、現在作製している標本の利用目的について紹介したいと思います。

骨格標本とは主に脊椎動物の硬骨組織を残した標本のことで、保存性がよく、動物の種類を判断する材料として、古くから用いられています。

作製には、虫（カツオブシムシ等）に食べさせるなどの様々な方法が知られていますが、私たちはメスやハサミを用いて除肉をおこない、除菌ハイターに含まれる次亜塩素酸ナトリウムの効果を利用して、残された肉組織を溶かす方法を使っています。最後にワイドハイターに含まれる過酸化水素を用いて脱脂脱色をおこないます。詳しい方法は佐々木・岡（2010）硬骨魚類の骨格標本作製法（東海大博研報, 10号, 51-57）をご参照ください。上記の方法により処理された骨は乾燥させた後、目的に応じた状態へと加工されます。

骨格標本の加工の一つとして多くの方が想像する図2のような組み立てられた標本は骨の構造が理解しやすく、迫力があるため、世界中の博物館が収蔵保管しています。一方で、奥まった骨などが見えにくいという問題もあります。そこで、私たちは、すべての骨の形状が理解しやすい標本の作製を目指し、それ

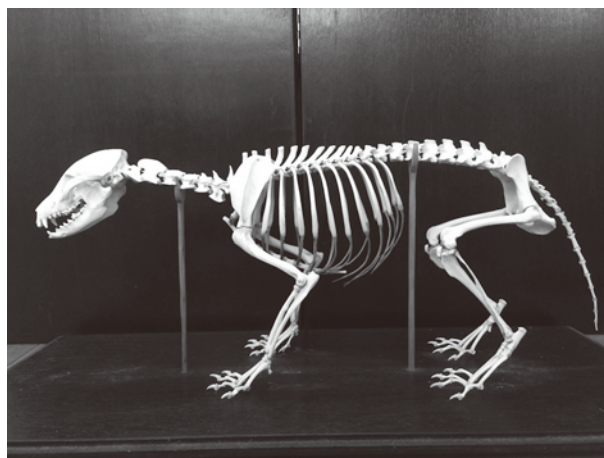


図2. タヌキの組み立てられた骨格標本

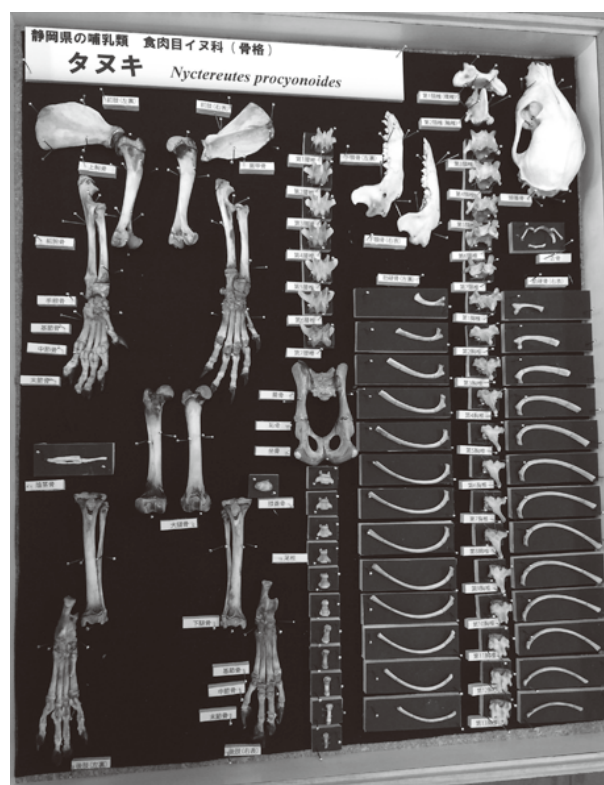


図3. タヌキにおける部位ごとの骨格標本

それぞれの骨を部位ごとに並べ、対になっている部位については表面と裏面をみせるようにして配置しました。そして、すべての骨に対応するように骨の名称が書かれたキャプションを付置しました（図3）。

以上の方法により作製された標本は、動物の骨の種類を検索する目的に使用するほか、県内各施設で開催されるミニ博物館などに出展したいと考えています。